

令和7年度秋田県立図書館協議会 要旨

- 1 開催日時：令和7年10月29日（水） 午後1時30分～午後3時
- 2 会場：秋田県立図書館 3階多目的ホール
- 3 出席者：会長 高橋 秀晴
委員 土崎 真紀
〃 伊藤ひろみ
〃 下夕村公子
〃 川越よし子
〃 村山 喜宏
〃 三戸 忠洋
〃 九嶋 洋子
〃 佐々木光雄
〃 十文字真奈
事務局 内田 鉄嗣 教育庁生涯学習課長
青谷 忍 〃 社会教育・読書推進チーム主査
田中 博光 秋田県立図書館長
成田 亮子 〃 主幹(兼)情報チームリーダー
小山田 希 〃 主任図書専門員(兼)図書資料チームリーダー
嵯峨 進 〃 副主幹(兼)サービスチームリーダー
芳賀奈央子 〃 副主幹(兼)企画・広報チームリーダー
嶋田 真一 〃 副主幹(兼)総務チームリーダー

4 議事概要

- (1) 開会
- (2) 委員紹介
- (3) 事務局職員紹介
- (4) 生涯学習課長あいさつ
- (5) 図書館長あいさつ
- (6) 報告

■表記について（●：委員、→事務局）

令和7年度秋田県立図書館の活動状況について（田中館長及び各チームリーダーから説明）

●入館者数や他の数字もだいたい例年通りの数字だと思うが、入館者のカウントはどのようにして計測しているのか。また、市町村立図書館等への主な取り組み実績で、市町村立図書館への訪問とあるが、図書館運営に対する質問や指導といったことでよいか。

→ 閲覧室入り口にあるセンサーによる計測であり、過去に職員による実数カウントと比較し、係数をかけて実態に近い数字を出している。レファレンスに関しては、入館者減にも関わらず若干増えている。

→図書館訪問の目的としては、県立図書館からの情報提供のほか、各図書館の相談に応じるということである。

●図書館アプリについて、利用状況、アプリのダウンロード数、目標設定、現在のPR方法の3点について教えていただきたい。

→アプリについては、アプリ自体がシステムメーカー共通となっており、同じシステムを導入している他の図書館と共用という形になる。ダウンロード数は、当館と他の浜松市立図書館や大阪市立図書館と合算された数字になるが、AppStore では約1万100件のダウンロード、Googleplay では2,300件のダウンロード数となっている。当館単独のダウンロード数がいくらかというのは、残念ながらメーカー側でもAppleとGoogleが持っている数字なので詳細な分析はできない。体感としては、実際に毎日カウンターにいと、1日に数人は図書館の利用カードではなくスマホで利用する方がいるので、徐々に増えてきていると思われる。まだ実験的に入れた段階のため、今後どの程度利用を促進していくかを考えていくことになるが、今のところ、カウンターにチラシ等を用意し、新規に登録される方にはアプリの利用も進めるほか、ホームページに案内を掲載している。

●大河ドラマで平沢常富役の方が演じられているのを、私自身も興味深く見ているが、図書館にレファレンス、質問、調査といった要請はあったか。

→レファレンスでは、秋田放送局から、例えば「能代のべらぼう凧」というのは江戸の言葉の「べらぼう」とどのような繋がりがあるのかといった、周辺情動的なものが何件もあった。

●県の文化財に指定になっている資料についても、NHKが調査しているわけではないのか。

→この展示を行う際に、NHKの秋田放送局から後援をいただき、色々やり取りをしていたが、ドラマを作っているのは渋谷のNHK本社で、秋田放送局の関わりはあまりなかったようである。10月に男鹿市の文化会館でイベントがあり、平沢常富役の俳優さんがトークショーをやった時に、県公文書館の担当者が資料の説明をしたということはあったようだが、特にドラマ部門からの要請として、文化財の調査のようなものはなかったと記憶している。

●文化財や文化資料は唯一無二であり、後で増やそうと思っても増えないので、先ほどの郷土資料の収集や保存といった活動は、非常に大事な活動だと思っている。

●資料購入費が、昨年度と「ほぼ同額」というのは、具体的にどれぐらいの金額で、県民1人当たりになるといくらかになるのか。また隣県との比較ではどのような状況なのかを教えていただきたい。

→新聞や雑誌を含んだ数字になるが、3,900万円ほどである。県民1人当たりの数字は今手元に資料がないため、正確なところを申し上げることはできないが、日本図書館協会あたりで出している統計などを見ると全国の順位などが出てくるかと思う。分かり次第、正確なものをお出しできればと思う。

●本の値段も上がっていると思うが、購入図書冊数を見ると昨年よりも増えているということで、色々と工夫して購入されていると思うが状況はどうか。

→今年度は、図書の購入が順調に進んでいることから増えているように見えるが、選定の数字としては例年並である。昨年度あたりから図書の単価が上がったという実感があり、雑誌も少しずつ上がっている。雑誌で言うと週刊誌が10円、20円上がると年間では結構な数字になる。また図書も、絵本の単価が100円程度上がってきているという感じがある。そういったことを含めると、全体の購入数が少しずつ減ってきているのは、ここ1年2年ぐらいで実感しているところである。

●図書の選定方針、例えば年度ごとに特定の分野に力を入れるといった取組はされているのか、市町村立図書館における選書の参考にしたいので教えていただきたい。

また、購入先はどのようにしているのか。

→選定については、当館職員で組織する「図書選定委員会」があり、そこで行っている。年度の初めに、収集方針について重点目標を決めており、例えば、県の課題に対応した資料や、県の目標になっているものに対応した資料を購入していく、あるいは読書バリアフリーの法律ができたので、そういったものを重点的に買っていくなどである。実際の選定は、選定委員が30人ぐらいいるので、各分野、分類ごとに数人ずつ分かれて、ある特定の分野を4～5人で選定していくという形で進めており、それを踏まえて最終的に決定している。また、それ以外にも、私たちの目では届かないような専門分野については、専門機関からの協力を得て選定している。例えば、農業試験場や総合教育センター、秋田大学医学部等、特定の専門分野の資料の選定については、協力をいただいて進めている。

図書の主な購入先は、現在秋田市内では外商をやったださっているのが加賀谷書店しかないもので、加賀谷書店から購入している。加賀谷書店以外では、直接購入で出版社から買うようなものも存在する。

●選定委員が30人ぐらいということだが、ほとんどの職員が委員ということか。

→司書の資格を持っている者と、資格がなくても業務に携わっている職員で構成されている。限られた人でやっているわけではなく、広く色々な職員の経験や知識を取り入れられるような形で、30人ということになっている。

●湯沢市の駅前に施設ができる。その中に図書館が入るが、県立図書館から何か指導をお願いしたいといった声はあるか。

→先月、雄勝図書館に訪問させていただき、その時に館長もお見えになったので、新図書館についても色々話をうかがった。新しい湯沢の図書館は、指定管理での運営となることで、図書館単独ではなく、子育ての機能なども持つ複合施設になるということであった。今後、図書館の中のレイアウトや、どういった排架にするか、サインをどうするかといった具体的な話になってきた時には、過去の事例などが参考になるかと思うので、その際は是非ご相談いただきたいと話をしてきたところである。

●選書に関して、重点目標は毎年変わるものなのか、それとも継続するものがあるのかということと、その年ならではの重点目標を定めるにあたってどのようなものを参考にされているのか教えていただきたい。

→重点目標については、県の読書推進計画に基づいているため、それほど毎年変わらない。

→全体的な運営の重点目標として、昨年は、6～7年に一度のシステム更新という非常に大きな業務があったので、一般県民や、市町村の図書館の職員が県立図書館の本を利用しやすくするための利便性の向上を運営方針として入れた。また、デジタルアーカイブの充実も、重点になっている。選書に関することで、県の読書推進計画にまつわる内容も多いが、秋田県全体の課題になっている少子高齢化、ビジネス支援、子育て支援、県民全体の健康アップのための支援といったことも重点目標に入れている。

●県内で指定管理で図書館運営をしているところはあるのか。あるとすれば、県立図書館との関係性はそれまでと違ってくるものなのか。

→秋田県内の市町村立図書館で指定管理になっているのは、能代市、大館市、鹿角市で、いずれも平成27～28年頃に導入が始まった。鹿角や大館では、今回の湯沢市と同様に、子育て支援施設や市民センターなどと併設の図書館のため、図書館としての機能の中でどこに重点を置くか、どのようなサービスを取り入れたらいいかといった相談があった。そのため、当館職員が現地に赴き、職員の方々と協議を重ねながら新たな図書館の準備を進めていったという経緯がある。大館市は、市の事業団が運営を担っている形で、実際には、大館の教育行政に詳しい方が館長をされていたということもあり、関係性としてはこれまで通り変わらずであった。能代市は、能代図書館のみ指定管理になり、二ツ井図書館は市の直営である。指定管理は図書館の専門の会社が請け負ったということだが、我々も能代の新しい体制やサービスを見て参考にするところもあるし、指定管理の職員の方たちに対しても、必要な情報提供をし、研修なども協力できる部分は協力しながらやっている。相互貸借と当館からの協力貸し出しについては、今までと全く変わらず行っている。

●指定管理の図書館と県立図書館との関係性や業務に関しては、大きな変更点はないということか。また、指定管理が進んできた時の懸念として、入館者数や貸し出し数といったところに特化していき、図書館の大きな役割である、レファレンスや郷土資料の収集といった、数字に現れないところがおろそかになってしまうのではないかといいことがかつて言われていたが、今のところそのような心配はなさそうか。

→実務を担当している立場としては、関係性や業務に関しての懸念はそれほどでもないと思う。

例えば西日本の方だと、TSUTAYA書店が入ったり、地元にはかない郷土資料が廃棄されてしまったりする事例も聞こえてくるが、本県に関しては、能代図書館は能代の地元の俳人に着目した取組等を、指定管理の方たち自身でやっていたという状況である。また、鹿角市にしろ大館市にしろ、実際に指定管理とはなっているが、館長やサービスを担っている職員が、これまでお勤めしていた方や地元の教育行政の担当者のため、郷土資料に対する扱いなどが変わってきたということはないと認識している。

●指定管理制度が良い悪いではなく、そのやり方や選定の仕方、運用の仕方が大事だと思う。

(7) 協議

秋田県立図書館への要望・提言等について

●以前、水害があった年に特集をやっていたが、ニーズもあったし、評判も良かったと聞いている。その後、例えば今であればどうするかといったことについて、考えていることや実施したことはあるか。

→水害のあった年には郷土資料担当が素早く動き、ハザードマップや市の水道局で出した地図等をすぐに市役所から入手し、それを掲示した。来館者の反響も大きかったと記憶している。今回も明徳館がクマの出没を受けて、開館時間を7時から17時に早めたということもあり、その時が来たらどう動いていくかという、情報提供のための展示や特設コーナーを作るということは方法の一つとしてあるし、避難訓練等利用者の安全を守るという部分も課題である。まだ検討中ではあるが、問題意識を持っている。

●図書館のイメージとは違い、リアルタイムにすぐに反応して、今必要な情報を図書館で提供することが非常に印象に残っている。そういった姿勢を今後も持ち続けていただきたい。

●以前、一般書の寄贈は求めていないと聞いたが、寄贈図書はどのようなところから来るのか。また、寄贈以外に購入する場合、書店等から新刊を購入していると思うが、例えば古書、中古本

を購入してはいけないのか。必要としている本を個人が持っている場合、ネットなどでアピールして募集もしくは購入できれば、そういった購入方法もあるかと思うがどうか。

→郷土資料については、自分で出版した本や、県内の出版社から発行されたもの等が寄贈されることが多い。一般書の寄贈では、国で発行している白書や民間機関から出た報告書も収集しているので、これらも寄贈図書という扱いになる。それ以外にも、児童書は、秋田県教育関係職員互助会から、毎年大口の寄贈がきている。金額にして約 450 万円で、毎年寄贈されるので、これはボリュームとしては大きい寄贈である。

郷土資料については古書も購入している。古書店から出る目録を探して、例えば郷土の出身者が書いたものの原稿や発行された昔の統計書を購入して、一旦秋田の外に出たものを東京の古書店から買うことも時にはある。ただ、個人の方から直接金銭で売買するということは、今のところ体制が整わず、難しいところがありできていない。現段階では、あくまで書店等から正規の経路をたどって購入するという形になっている。

●先日、魁新報で「読書0分 小中高校生の半数がスマホを使うほど短時間でほとんど本に触れていない」という記事があった。そんな中で嬉しかったのは、同日のこども新聞で「本との出会いを楽しもう」という企画をやってくださり、県立図書館の職員がお薦め本の紹介等をしていただいていることである。対象者は県立図書館の場合、どうしても高齢の方が多いようだが、やはり子どもたちと本の出会いをこれからも大事にしていきたいと思っている。

先日、小学3年生が「すがたをかえる大豆」の勉強を行った際、担任が自分で図書館に出向いて、大豆に関係ある本や食べ物についての本を一生懸命探して教室に展示したところ、子どもたちはすごく喜んで「借りたい、借りたい」と心が動かされている場面があった。子どもが本に出会う場を作るのは、やはり大人の役目でもあると実感したところである。したがって要望となってしまうが、今後とも県立図書館には、小さいお子さんを育てているご家庭向けや小学生向けのイベントを企画していただきたい。

→今後の子ども向けのイベントに関しては、現在決まっているものはないが、今年度は、こども園の子どもが図書館で貸し出し体験を行ったり、近隣の川尻小学校の2年生が授業の一環で図書館見学を行ったりする中で、15分ほどの読書体験をしてもらっている。今後もこのような団体での見学等が数多くあればよいと考えている。

→生涯学習課では子どもの読書活動の推進を担当しており、今年度から保護者向けの事業として「あきた県庁出前講座」で「読み聞かせを楽しもう」というメニューをスタートしている。対象は保護者やPTA、教職員で、子どもにどんどん読み聞かせをして、絵本を通して触れ合う時間を持てるよう、子どもの周りにいる大人の方々に少しずつ広げていけたらと思っている。今年度はすでに4回実施しており、小学校のPTAの保護者の方や保育園の先生方にご利用いただき、少しずつではあるが出かけていく機会もある。今後は図書館や学校で企画していただき、呼んでいただく機会が少しずつ増えていけばよいと考えている。

●このような講座があることを知らない先生方も多いと思うので、ぜひ宣伝をしていただきたい。秋田は人口が少ないが、こうした企画がどんどん多くの人に伝わって、だからこそ良い本や良い人に出会える、そういった場をこれからの子どもたちに作っていただければと思う。

●読書とは、紙に印刷された活字の世界から、実際の風景や感情といったものを立ち上げる作業で、これは人間が育っていく上で非常に大事な体験である。映像は組み直さなくても目に見える情報と耳からの情報が入るので分かりやすいが、映像も音声もない活字からある世界を立ち上げる体験というのはとても貴重で大事なものだと思われる。

私の大学は全国で一人当たりの貸し出し冊数が非常に多い。司書が、例えばクリスマスに企画や、持って来た本の数だけ持ち寄った他の本を持って行って良いという企画、それから海外研修に行くと言ったら、イタリア特集など、その都度、学生に関係のあるようなものを次々に企画し、それをPRするために学食等に幟を立てる。そうした取組が実際の数値に現れているのではないかな。

私もそろそろ退職が近いので、自分の研究室の横にダンボールを置いて「ご自由にお持ちください」として本を置くのだが、私の大学は農学系や工学系で、文学とはあまり関係なさそうではあるが、ほとんど2、3日でなくなる。色々な可能性というか、先ほど言ったような状況の中で、かえって彼らもそういうところには飢えているというか、新鮮な何かを感じている可能性もあるかなと思う。

●実習で小学校に行ったのだが、思ったよりも子どもは色々な本を読んでいた。一番驚いたのは、2年生が、吹き出しの言葉が英語で、その上に日本語訳がついているドラえものの漫画の本を読んでいたことだった。読書していない子どもに対し、どうしたら読書に親しんでもらえるかを考えがちだが、「どんな本を読んでいるのか」という方に焦点を当て、例えば、英語が書いてある本に興味を持っているのなら、もう少しそういう本を増やしたら、読んでいる子はもっと本に興味を持てるようになると思う。絵本等はやはり皆好きで、親しみがあるし、パッと読んで「こういう考えになるのって面白いよね」という話もする。活字は「これなんて読むの？」という興味もあって触れる子どもも多いかと思うが、先ほど話のあった「活字から自分で風景を作っていく」のが面白いと思えるような楽しみ方を知らないから、本から離れていくのではと思った。私自身も、本は年を重ねるごとに読まなくなってきた方だったので、もう少しそういうことを早めに知っていたら、もっと興味が湧いたと思う。

●大人の価値観があって、そこに沿わせようとするのではなく、子どもたちの実態にまず寄り添って、何だったら彼らは興味を示すのか、どうしたらその世界に入ってくれるのか、という立ち位置を変えるということを今教わることができた。

●読み聞かせ等のボランティアをさせていただいている立場で、二つ要望がある。えほんのへやにいて、子どもがレシートを持ってきて「この本どこにありますか？」と聞かれることがあるが、

えほんのへやに来た親も子どもも、あそこにある本が全てというように見えるかもしれないので、書庫にまだまだ面白い本がたくさんあるということ、分かってもらえる方法がないかと思っている。書庫の見学もあるようだが、えほんのへやに居ながらも書庫の存在を感じ取れるものがあればと思う。

もう一つは、閲覧室に素敵な絵がたくさんかかっているが、その下で静かに読書している方々がいると、そこまで行って絵を見るということがなかなかできない。この絵をゆっくり見られる機会があればありがたいと思う。

→思いついたアイデアだが、書庫の写真を貼るといった工夫はできるかと思う。他に何かアイデアがあったらぜひ教えていただければと思う。

→私も去年近代美術館にいたので、閲覧室の絵は来た時に気になって見てはいたのだが、なかなかゆっくり絵画を鑑賞していただく場面というのは作りづらいと考えている。今後検討して、何かできるか考えたい。

●書庫をいかに見えるように、気付くようにするか。子どもたちは長い文章は読むことができないが、マークや、吹き出し、あるいは引きつけられるようなキーワードを用いることにより理解できる場合もあるかと思う。小学校では子どもの側に立って、子どもたちがどんな今流行りの言葉で引きつけられているかというのを私たち教員が探して掲示しながらやっている。写真は一瞬で目に入るのととてもいいと思う。

NHKとのドラマ企画の話もあったが、今年は「あんぱん」が流行ったので、やなせたかしさんに関する企画も、第2弾、第3弾といったものも喜ばれるかなと感じた。

●小中学校の頃は、読む時間があつたから本を読むのが好きだったが、高校生になると全く読む時間がない状況もあるので、通勤時間、通学時間に読めるように電子書籍を取り入れても良いのではないかと思う。返却期限が過ぎることもなく、その分スタッフの方の手間も無くなり、また、秋田市以外の方でも電子書籍だと利用しやすくなるので、少し考えていただいても良いのではないかと思う。

また、市町村立図書館と県立図書館の役割は、若干違うと個人的には思っている。市町村立図書館や学校図書館だと、利用を増やすためには、利用者が求める分野の本を多く入れれば単純に増えることもあるような気がするが、先ほどの報告には、シニア、ビジネス支援、子ども支援といったことがあつた。貸し出し数増加を目指すだけでなく、市町村立図書館からカバーできない、より充実した所蔵を目指していただきたい。少子高齢化も進んでおり、利用者のことを考えれば、求められる分野を増やすことで単純に増えるとは思いますが、そういったことを偏りなく進めていただきたい。

●電子書籍については、これまでも議論になっており、予算の問題や読めなくなる状況をどうするかといった制約について話題になったと記憶しているが、その後の議論は進んでいるか。

→電子書籍については、職員の中でも度々話題になり、図書選定委員会の中でも、今後どうしていくべきか継続して議論しているところである。ただ、予算や仕組みづくりでハードルがいくつもある。また、県がやる電子書籍が、県民全体を対象にするのか、ターゲットを絞って、例えば障害を持つ方に向けて重点的にやっていくのか、学校支援を重点的にやっていくのか、やり方が様々あると思う。当館としては、電子書籍のサービスのターゲットをどこにしてやっていくべきかというところが一番大きいのではないかと考える。単純に秋田市立図書館と同じような本の種類を揃えてやってもあまり意味がなく、図書館としてやるべき電子書籍サービスがあるのではないかと、日頃の業務の中で議論をしている。現在の状況としては、まだ検討中である。

●やはり実態のあるモノと違い、お金を使って用意してもそれが形にならないということがあるので、そこをどう考えるのか。一度そちらにシフトしてしまうと後には戻りにくくなるので、慎重な議論が必要かと思う。また、電子書籍にも返却期限はある。

先ほど話のあった、一般の市町村立図書館との違いとして、自覚的にやっている選書や、偏りをどうするかという点については、どのように考えているか。

→選書の面で言うと、市町村立図書館と当館ではある程度異なる特色が出ると思う。例えば、市町村立図書館からリクエストが当館に回ってくることがある。学術書や高価な本、市町村立図書館には馴染みにくい本等について、市町村立図書館で購入して、その後その市町村図書館で生かされるか考えると、これはやはり県立図書館で持つべきではないかという判断があり、当館にリクエストが来ることがよくある。資料の内容や利用者に合わせて、どちらが持つ方が良いかは、今後も棲み分けていけたらよいと思っている。

通常の購入についても、当館としては、秋田市民も使う図書館なので柔らかいものも用意するが、やはり調査相談に来る方が多いことを考えると、それなりに少し固めの本、学術的な本も重点的に買っている。そういった意味では、市町村立図書館と当館では資料の中身が少し違ってくると考えており、役割の違いが出てくると思っている。

●小・中高生の話にも少し関係しているが、高校生は忙しい中で本を読むのは大変だと客観的に見ている。セット貸し出しや図書館への貸し出しで18校出しているが、どの程度その本が高校生の手に渡っているのか、データやフィードバックはあるのか。

→セットの中にアンケート用紙を入れており、「よく利用された」「あまり手に取られなかった」というような4項目で丸をつけていただくのだが、よく使っていたりしているセットもあれば、残念ながら手に取られなかったというアンケートが返ってくるケースもあり様々である。

●学校の方の取り組みも色々あるかと思うが、高校生の手にもっと届くように、学校図書館の方々と連携協力し、意見交換しながらやっていただきたい。

●実際に本を取ってみる大切さについて感じることもある。私も毎週1回書架整理をしていて、いくらデジタルで探しても見つからないような本にたまたま出会うことが多い。先ほどの書庫の話で、書庫はかなり広いので全部写真を撮るのは大変だと思うが、Google マップのストリートビューのように移動しながら内部を見せるようなパターンもあると考えられるので、そういったものをバーチャル的な感じでみせられたら、自分が本棚を探しているような雰囲気になって、本を探す楽しさも味わえるのではないかと思い、提案させていただく。

→当館では、毎日1,000人前後が来る施設ということもあり、どうやったら効果的に図書館を利用してもらえるのか、効率的に活用してもらえるのかという案内の仕方について頭を悩ませているところである。書庫に関しても、バーチャルや映像的な部分での案内というご提案もいただいたので、これから考えてまいりたい。

●本日の意見や提案を、今後の運営に活かさせていただければと思う。

その他

資料推薦書について、小山田チームリーダーから案内を行った。

(8) 閉会